



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	レスポンス 「カルト」と「スピリチュアリティ」を並置したわけ：テーマセッション：カルト/スピリチュアリティ/現代宗教の把握
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	宗教と社会, 16, 255-257
Issue Date	2010
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47967
Type	journal article
File Information	Cult_shukyo_shakai.pdf



「カルト」と「スピリチュアリティ」を並置したわけ

櫻井義秀

私の編著のタイトル『カルトとスピリチュアリティ—現代日本における救いと癒しのゆくえ』を見たときに、確かに 2 つとも危ないものだと思うのは一般市民か、反カルト運動の陣営である。2 つは対極にある概念であるのに並置はおかしい。そう思うのは宗教研究者か、スピリチュアリティの実践家かもしれない。もっとも、『霊と金—スピリチュアル・ビジネスの構造』（新潮新書、2009 年 5 月刊）といった実も蓋もないような書名の本を出す私であれば、あえて挑発的・論争的主題を設定したのではないかと深読みされる方もいよう。

そうなのだ。本来、並んではおかしいものが並んでいるという現実こそ、現代宗教やスピリチュアリティの特質があるのではないかと筆者は考えている。しかしながら、大方の研究書は、カルトが信者に指導者と組織への従属的信仰を求める一方で、スピリチュアリティは個人を伝統と組織の軛から解き放ち、自由で自立した人間を形成すると考えている。そして、そのような思想や言説、事例を語ってきたのがスピリチュアリティ研究だ。

筆者が依って立つ社会学という学問は、外れ値の魅力よりも最頻値や平均的なところで現象の総体をおさえなければいけないと考える。そこで、どうしても現代のスピリチュアリティ・ブームや格差社会化といった社会の趨勢が気にかかる。占いブームや「すぴこん」に群がる現代人の心性を論評したエッセイが本書のスピリチュアリティ論であった。

本書は、現代日本のスピリチュアリティ・ブームを論じているので、西欧・北米におけるスピリチュアリティの伝統や、近年のスピリチュアリズム、それらの研究に通暁されている方にとっては、各論文の議論の地平の限定性が気になるところだろう。筆者達は、本質論的なスピリチュアリズムの論議、或いは個別宗教伝統にたつた歴史的なスピリチュアリティの議論では十分に捉えきれない、現代社会におけるスピリチュアリティのありように問題を絞っている。また、厳密な社会学的分析という点では、文化現象としてのブームと階層構造の変動を相関的に説明する理論とデータの整合性が問題になろう。

このように、観点はよいとして、よくよく読めば説明力不足という批判は甘んじて受けたい。しかし、このままスピリチュアリティ・ブームが続き、カルト集団（或いは宗教団体のカルト化現象）への対処もないままでは、市民の権利や生活が侵害され、公共性の意識を欠いたままで宗教性・スピリチュアリティの感覚に耽溺する人達が増えていく。本書を読まれる際には、このことを強く懸念する筆者達の問題意識を汲み取っていただきたい。

非常に月並みないいい方になるが、個人の努力で人生や社会を変えられないと思わされるような社会状況において人は個人を超えるもの（個から全体に通ずるスピリチュアリティか、ファンダメンタルな超越性）に依存するようになる。参照点を個人に設定したスピリチュアリティか、関係性への依存や嗜癖となるスピリチュアリティか、同じ格差社会化を経験している地域においても、スピリチュアリティの含意や現象形態に歴史的・文化的な差異があるように思われる。現代日本においては、明らかに超自然的（自然科学の論理を

超えているという意味で)・感性的な現象把握がスピリチュアリティの特徴をなしている。

現代人のスピリチュアリティは宗教伝統の旧弊を打ち破っても突き抜けてもおらず、むしろ宗教伝統が蓄積してきた人間や社会に関わる知恵を棄てているように思われる。個人の成長はもとより、生活の安定にも寄与しないスピリチュアリティに何の価値があるのか。

このようなスピリチュアリティ・ブームが流行る社会背景として、1990年代以降の閉塞的な労働市場や階層間移動が関わっていることは、新たな社会問題として指摘して良いと思われる。社会的一体感やコミュニティ意識を提供できなくなった社会において、擬似的な親密性を演出するカルトや、具体的な人間・社会関係を捨象して自然や人類とつながるスピリチュアルな意識にはニーズがある。しかし、サプライサイドに弊害が懸念される団体があることも事実である。それがいかに主観的には癒しや救いと認識されようとも、長期的観点で見れば、当人の生活障害や社会的危害をもたらす意識や生活形態に変わる可能性が少なくない。カルトやスピリチュアリティへの耽溺による時間の喪失や資産の費消、なにより自分で問題を解決する志向をなくすことによる将来の遺失利益が気にかかる。

宗教現象を見てブームであるとかないとか、歴史・地域間における現象の形態的差異を述べて学問的蓄積とするだけでは、現代の宗教研究者は大学のみならず、一般市民からの期待にも応えられないと思う。文化現象を時代の中に読み込み、その意味を考え、そこに問題があるのであれば解決の処方箋を模索する営みがなければ、思想的営為とは言えない。

さて、以上で筆者の宗教観や現代社会への認識を明確にしたので、最後に本書に加えられたもう一つの大きな質問、従前の新宗教研究にどう接続させるのかに答えておこう。

筆者は連続よりも断絶面を強調したいと思う。文化現象や宗教組織を扱うという点で対象に共通性はあるが、研究方法論としてはこの2, 30年の新宗教研究とは一線を画したい。

①調査を許容しない社会問題性の強い団体(カルト)には脱会者や当該団体の批判陣営と協働しながら調査を行うアクション・リサーチが適しており、教団がアレンジしてくれた状況・対象者・資料に依拠した従前の教団研究では得られないリアリティが明らかになる。

②調査対象者の了解やプライバシーの尊重といった社会調査倫理の枠内に収まらない調査過程もあり、研究成果の公表により当該団体に係る社会的論議を喚起しようという実践もある。研究者は強い立場性を求められるだけでなく、批判や社会過程に巻き込まれていく。

最後になるが、宗教研究の射程や対象は広大なものであり、学問領域に応じた方法論を自由に適用して研究していくことは自由になされてよいと思う。また、本書の各論者の間にもカルト、スピリチュアリティ・ブームに対する認識に差異がある。それをあえて統一しなかったところこそ筆者達の研究志向がある。但し、近年の宗教研究、教団調査の現況を見るに、筆者のような視点や方法論によって従来の新宗教研究との間にバランスを取ることも必要ではないかと考える次第である。